第6回医学図書館員基礎研修会報告

坪内政義*

愛知医科大学医学情報センター（図書館）

1. はじめに

1999年12月8日（水）～10日（金）の3日間、愛知県長久手町の愛知医科大学において、日本医学図書館協会（以下協会）第6回医学図書館員基礎研修会を開催した。テーマは「医学図書館員であること－自己研鑽の方法」。ご承知のとおり、医学図書館には扱う資料やサービスの手段・方法など、他図書館とは異なる特徴がある。したがってそれ相応の学習が必要となるわけだが、要はいかに自己研鑽するか、であろう。そのための方法を学ぶ。これがテーマの趣旨である。

なお、基礎研修会は従来、近畿地区と関東地区がほぼ交互に担当し、例年8月に開催されてきた

が、1999年5月福岡総会での新教育大綱の承認にとともに、1999年度から全国各地の持ち回り開催となった。今回の東海地区開催は、大綱改定後初のものであるが、総会承認後に準備をはじめたこと、また会場となった愛知医科大学の都合によって、特に冬季開催としたものである。

2. 開催準備

6月に実行委員会を立ち上げ、開催までに委員会をほぼ月1回計6回開催した。日程、会場（使用講義室）、プログラムなどを順次決定、講師選定、依頼など、開催に向けての手続きは順調に運んだ。今回、参加資格を特に設けず、また部分参加も認めたが、これは「参加したいが、3日間通しては無理」という場合を考慮したものである。

準備段階において、講義で使用する機器の操作に講師、実行委員ともども習熟するよう心がけた。最新の機器は講義を効果的に手助けするが、「駆

*Masayoshi Tsubouchi : 〒480-1195 愛知県愛知郡長久手町大字岩作字雁又21.

Tel. 0561-62-3311 Fax. 0561-62-3348

mtsubo@aichi-med-u.ac.jp

（2000年2月21日 受理）

講義室にて

マルチメディア教室にてデータベース演習

使」できなければ進行を阻害する。会場にあてた講義室とマルチメディア教室には、パソコン、OHP、スライド、ビデオ各機器が装備され、また学内ネットワークやインターネットと接続する準備も整えた。

プログラム編成上の考慮点は次のとおりである。

- ① 講義は基本業務を網羅する。
- ② データベース演習では受講者自身が端末を操作できるようにする。
- ③ 講演は医学図書館を内と外から語るものとする。
- ④ グループ討議の進行は受講者にまかせる。
- ⑤ スケジュールに余裕を持たせ、講演にも寛いで聞けるものをひとつ用意する。

3. 受講者への連絡と広報

受講者には開催約一カ月前に、受講者名簿、グループ討議班別名簿、交通案内などを送付した。同時期に基礎研修会ホームページも開設し^{注)}、会場の様子、開催地名古屋のガイドなど、多くの情報が事前に伝わるよう配慮した(研修会終了後にはスナップ写真も公開)。また、実行委員会からの連絡や受講者からの問い合わせもほとんどがE-メールによって行われた。

ただし、インターネットが利用できない参加館(室)もあり、受講者全員への広報、連絡にはそ

の点への配慮が必要であった。

(注：詳しくは、医学図書館本号掲載「基礎研修会のホームページを作成して」を参照)

4. プログラムの実際

初日、会を「日本医学図書館協会への招待」からはじめた。協会の活動は各図書館の業務と密接な関わりを持っているが、内外の情勢の移り変わりに従い、関わり方に変化の兆しが見られるのは周知のところである。

プログラムは、6つの講義、2つの講演、鼎談、そしてグループ討議からなる(プログラム参照)。以下、種別にその模様を報告する。

1) 講義

1日目の「図書」「雑誌」「相互協力」では、それぞれの業務において知っておくべき基本について概説し、あわせて昨今のトピックを取り上げている。ネットワーク時代の目録・分類のあり方、価格高騰と電子ジャーナルの登場に大きく揺れる医学雑誌、相互貸借件数の増加にみる大学図書館と病院図書室の協力関係等々、各業務における課題は多い。基本を見据えたうえで、受講者各人がこれらに対する問題意識をさらに高めてくれれば幸いである。

2日目に「参考1, 2：データベース検索演習」として、Journal Citation Reports (JCR), Best

Evidence, PubMed, 医学中央雑誌を取り上げた。JCR といえば Impact Factor, Best Evidence といえば EBM。この 2 つは医学図書館界の流行語といえそうなほど近年話題になっているが、この研修会ではじめて触れる受講者もいたようである。情報環境が館（室）ごとに異なるため、共通の条件で演習が行えるとは限らない。PubMed, 医学中央雑誌でも同様である。しかし、こうした機会に見聞を広めるだけでも意義があるのではないだろうか。

4 つのデータベースすべてに詳細なテキストが用意され、検索法について長時間の演習が行われた。JCR と Best Evidence は講師の操作画面をスクリーンと受講者用端末に映し出すにとどまったが、PubMed と医学中央雑誌は受講者自身がキーボードを叩き、実際に検索する方法をとった。MEDLINE 演習を PubMed で行ったのは、医師・研究者のあいだでは PubMed による検索が当たり前になりつつあること、また CD-ROM と違って同時アクセス台数に制限を受けないためである。一方、医学中央雑誌は研修時に Web 版がリリースされておらず、CD-ROM を使用せざるを得なかった。このため、医学中央雑誌刊行会に対し、受講者全員の同時アクセス許可を申請し、快諾を得た。改めて刊行会の好意ある配慮に感謝したい。

3 日目、講義の最後は「図書館員に必要なコンピュータの知識と技術」。ハードウェア、ソフトウェア、コンピュータ言語などの紹介にはじまり、講師の実践例から図書館とコンピュータの今後の関わり方まで、専門用語の飛び交うなかに、現在の図書館業務の一面が語られていたようである。

2) 講演

1 日目の講演では、医学情報サービスの起源から説き起こされ、変わりつつあるネットワークの形態、EBM, IAIMS, IRM に代表される情報資源の再組織とそれに関わる図書館員の役割まで、外国の先進の実践例を交えながら、現在およびこ

グループ討議

れからの医学図書館員が進むべき方向が語られた。

一方、3 日目の講演では、情報技術との出会いによる医学・医療の変化のなかで、医学図書館が教育、研究、臨床において、いかに重要な役割を担っているかが具体的に語られ、さらに医学図書館は医学情報発信源としてどのように社会に向かって開かれうるか、それが今後の課題であると提議された。

2 つの講演の語り口は、内からにじむもの、外から切りこむもの、といった具合にそれぞれ個人的であった。しかし、実は同様の内容を異なる立場、視点から語ったものである。医学図書館は情報を収集・組織・共有し、広く提供するのが務めである。様々な模索がそこにあるが、もっとも重要となるのは、業務に携わる人と人とのネットワークであろう。そしてもうひとつのポイントは、1 日目の講演において Paul Gauguin と Lewis Carroll から引用された「どこへ行こうとするのか」「何がしたいのか」を、図書館員として常に問い続けられるか、にありそうである。

3) 鼎談

受講者にはどちらかといえば若い人が多い。この道のベテランの体験談は、励ましとも慰藉ともなるのではなからうか。自らの仕事ぶりに照らし合わせるなら、反省のきっかけにもなる。聞くうちに、私もやれる、という気になってもらえたな

ら企画した甲斐がある。

講師の顔ぶれは三者三様、どなたもそれぞれの職場でさまざまな自己研鑽に努められた方たちであった。

4) グループ討議

「図書」「雑誌」「参考・閲覧1,2」「相互貸借」の5班に分けて行った。実行委員会にて班分け、班長を決め、事前に受講者全員に連絡。さらに、討議テーマの設定も班ごとに開催前に決めておくこととした。

時間を2時間30分確保したが、それでも不足したかもしれない。開催前に連絡を取り合ってもらったとはいえ、実際に顔を合わせてから間もなく、討議が滑らかに運ぶまでに多少は時間を要したに違いない。また、班には業務は同じでも職場環境の異なる人が集まっている。考え方や意識の違いから討議をまとめていく難しさがあったと思われる。ただし、だからこそそのよさもある。環境にかかわらず業務目的は共通であること、違いは違うほど互いの理解が必要であることなど、多くの発見があってよい。研修後の受講者アンケート*では、この点相半ばした結果となっていた。

ともあれ、グループ討議はいろいろな意味で受講者にとって貴重な機会となる。より充実したものにするため、今後さらに工夫が凝らされるべきであろう。なお、班長を務めてくださった5人の方には事前の連絡調整から討議の司会、総括発表まで、おおいに奮闘していただいた(*:アンケート集計結果はJMLAホームページ、基礎研修会第7回実行委員会議事要録に掲載)。

5. 研修会を終えて

休憩をこまめにとるなどプログラムには余裕を持たせたつもりであったが、改めて振り返ると、いくらか過密気味スケジュールであったかもしれない。ただ、それが講義や演習の中身によるものであれば受講者からも大目に見てもらえるのでは

と思考している。例えば、データベース演習は膨大かつ詳細な内容であったため受講者から悲鳴(!)があがるほどであったが、そのくらいのボリュームが研修には必要だといえなくもない。つまり、研修を受けたからといって学習が完結するはずもなく、これにくじけず以後研鑽を積んでもらってこそ本研修会のテーマにかなうというものだからである。この点、受講者のみなさんが前向きに捉えてくださればありがたい。

研修会は業務知識と技術の習得が一番の目的である。しかし、そのほかにも参加の意義を見出すことができる。いっとき職場を離れ、同じ仕事に携わる多くの人に出会うことが、自らを見直す機会を与えてくれたり、新鮮な刺激をもたらしてくれたりする。今回の講義、講演において一貫して唱えられたものに「ヒューマンネットワーク」があった。各自がめざすものを明確に把握し、それに人と人との連携が加われば、医学図書館の将来展望はひらかれる…と。

受講者は大学図書館を中心とする協会会員33名、その他、主に病院図書室から27名の計60名であった。病院図書室からも多くの参加を得たことで、大学、病院を問わず、さまざまな交流がはかられたとすれば大変うれしい。規模や環境を越えたヒューマンネットワークが本研修会を機に誕生し、今後も継続されることを願っている。

本来なら文中にそのつど講師、演者名をあげるべきところ、小文の流れのために省いてあります。愛知淑徳大学山崎茂明先生、愛知医科大学安藤裕明先生、愛知学院大学河合達志先生、日本医学図書館協会茂幾周治専務理事、そして東海地区の図書館員の方々、ここに記してお礼とお詫びを申し上げます。また、前回開催館滋賀医科大学附属図書館から有益な助言をいただき、さらに運営にあたっては多くの方の協力を仰ぎました。あわせて感謝いたします。

第6回医学図書館員基礎研修会プログラム

テーマ：「医学図書館員であることー自己研鑽の方法」

期 間：1999 年 12 月 8 日（水）～10 日（金）

会 場：愛知医科大学 1 号館（大学本館）

15：20～15：30 休憩

15：30～17：00 講義⑤参考 2（データベース検索演習：医学中央雑誌 CD-ROM 検索法）
（愛知学院大学歯学部講師 河合達志）

第1日 12月8日（水）

9：30～10：00 受付

10：00～10：20 開会式・ガイダンス

10：20～11：00 JMLA への招待（日本医学図書館協会専務理事 茂幾周治）

11：00～12：00 講義①図書（岐阜大学附属図書館医学部分館 羽賀啓子）

12：00～13：10 昼休み

13：10～14：10 講義②雑誌（藤田学園医学・保健衛生学図書館 柿田憲広）

14：10～14：20 休憩

14：20～15：20 講義③相互協力（名古屋市立大学図書館川澄分館 今村久恵）

15：20～15：30 休憩

15：30～17：00 講演①「医学図書館とは？ーその現状と将来」（愛知淑徳大学文学部図書館情報学科教授 山崎茂明）

18：00～20：00 懇親会

第3日 12月10日（金）

9：45～10：00 受付

10：00～11：30 講演②情報はいかに利用されるかー図書館に求められるもの（愛知医科大学情報処理センター助教授 安藤裕明）

11：30～12：40 昼休み

12：40～14：10 講義⑥図書館員に必要なコンピュータの知識と技術（愛知医科大学医学情報センター 田中昭夫）

14：10～14：20 休憩

14：20～15：20 鼎談：医学図書館員であることー自己研鑽の方法（愛知県立大学附属図書館 安田多香子，浜松赤十字病院図書室 飯田育子，藤田学園医学・保健衛生学図書館 田中仁美）

15：20～16：20 グループ総括発表

16：20～16：30 閉会式

第2日 12月9日（木）

9：45～10：00 受付

10：00～11：30 講義④参考 1（データベース検索演習：PubMed その他検索法）
（浜松医科大学附属図書館 江口愛子）

11：30～11：40 休憩

11：40～12：40 グループ討議

12：40～13：50 昼休み

13：50～15：20 グループ討議

実行委員会

今村 久恵（名古屋市立大学図書館川澄分館）

加藤 大淳（愛知学院大学附属図書館歯学部分館）

近藤 正（浜松医科大学附属図書館）

榊原佐知子（愛知医科大学医学情報センター）

田中 仁美（藤田学園医学・保健衛生学図書館）

寺谷麻紀子（愛知県がんセンター図書室）

坪内 政義（愛知医科大学医学情報センター）